



故後藤信行教授

後藤信行君を悼む

中村亦夫*

Matao NAKAMURA

後藤信行君は、お彼岸の中日に当たる3月21日の13時30分、心臓血管研究所の病棟で、持病であった心臓病のため逝去されました。告別式などは送り彼岸の24日午後自宅に近い東光寺で行なわれました。よき日和に恵まれ、ご親戚は無論のこと、鈴木所長をはじめ同僚、友人、そして門下生と多数参列のもとに悲しく営まれました。信行君は大正8年12月26日生、53歳の働き盛りで、最愛のご遺族と研究途上の門下生を残し、世を去られたことは、誠に痛ましい限りでありました。

さて信行君は、第四高等学校を卒業の後、昭和17年東京帝国大学第二工学部応用化学科に入学されました。この年は、第二工学部が戦時下国家の要請に応じて、西千葉の広大な敷地に設立され始めた年に当り、信行君は第二工学部の第1回生として、同級の河添邦太郎君や佐々木正君らと共に、教室の整備を手伝いながら、勉学に勤しむといたはつらつとした学生生活を送られた。私は当時軍籍にあって直接に行動を共にしたわけではありませんが、信行君にとって生涯最も楽しい時代であったことでしょう。

研究面では、名誉教授の永井芳男先生について卒論研究を行なって以来染料や顔料など芳香族系の有機合成化学の研究を行なってこられました。29年2月に助手、35年10月に助教授、48年3月に教授といった履歴が示すように、その面では決して恵まれた環境とはいえなかったと思われまふ。しかし信行君は本当に実験が趣味だったのでしょう。最後まで自分自身でも実験を続けておられました。研究がよほど好きだったようで、生研ほど研究のできるよい所はないと口癖のように言って、自分の境遇に感謝しておられました。

趣味の面では合成実験は別として、本格的な訓練を受けられたと思われるテナーの美声で歌われる歌曲はあまりにも有名でした。また旅行も大好きなものの一つで、38年のヨーロッパ各国への洋行は消し難い記憶の一つだったことでしょう。“重いトランクを下げて歩いて、心臓はなんともなかったのに”とは最近私にもらされた話です。

信行君とは趣味などが別にあっていたわけではありませんが、同僚のなかでは私が最も親しかったようです。45年の夏、私が洋行するときには羽田まで送って来てくれました。3カ月の洋行から帰省したとき、信行君が心臓病で入院して重態だったと知らされました。早速に見舞に行ったときには、もう元気で間もなく退院とのことで安心した次第でした。その折、私が“持病のある方が体を大切にしますので、持病がなくてむちゃをする人（私のこと）より長生きをするよ”といったら笑ってました。そのとき信行君の頭の中にどんな思いが走ったのでしょうか。その後だんだん丈夫になられたようですし、教室では軽い役柄などお願いして元気に回復されるのを期待していました。去年12月6日に同級生の高橋史朗君と共にけんば会館でビールなどで馳走になったとき、持病の心臓のことを他人ごとのように話されました。年の暮入院されるときには、好きなレコードをテープレコーダに吹き込んで持って行かれるなど聞き、たいしたことあるまいと確信していましたし、1月の26日業務掛長の吉永さんと見舞ったときも元気で退院とのことで安心していました。しかし3月に入って再入院、点滴を受けてると知らされ、始めてこの重大さを知った始末です。

今日になってみると、信行君は自分の病状を知りすぎて多分に無理をやった節があります。たとえば昨年は門下生の時田澄男君と小川昭二郎君の結婚をまとめられたし、本誌の11月号には長文の新しい多環芳香族化合物“ジビオラントロニル”を起稿されたり、小川君には本年の国際学会の旅費を準備されました。また最近遺族の方々と一緒に教官室の机の引出しを開けてみて、あまりにもよく整理されてあったので驚かされました。ここでいま、信行君が持病を抱えながらも回復に向かわれると信じておった私の気持お察し下さい。

ご遺族には高校2年生になられた意志の強い敏生君と小学3年生の可愛い美和子さん、そして洋裁方面をやっておられる奥様の和様の3名ですが、淋しいなかにも力強く将来を切り開いて行かれることを期待いたしております。

残された後藤研究室は、幸い生前親交があり、また下に優しい熊野谿從君が継ぐことになりましたので、円満に行くことと信じております。

最後に後藤信行君、いろいろと思ひ残すことは多いでしょう。しかしお彼岸の死にふさわしく安らかに眠って下さい。心より冥福をお祈りいたします。

* 東京大学生産技術研究所 第4部